随想

〝旅〟
木曽路の旧街道を行く

後藤知久
（会員・佐伯市中山区）

新緑の季節である。緑というのはこんなに種類が多いのかと思う程、濃淡とりまぜた中に白や紫の藤の花、真っ赤なつつじ、路傍に咲く黄色い花と、車窓に写る生きものの喜びの姿を見るだけでも、この季節は旅にとって最高のシーズンである。

いつだったか、まだ役所に勤めていたころ、この五月の連休を利用して、四国路から中国路にかけて旅をして自然の美しさを十分満喫したことがあった。そういえば屋久島へ行ったのも五月の連休だった。うっそうと茂る杉木立の中に、この島特有のだいだい色のつつじが何ともいえぬいろどりを見せていたのを思い出す。

だが、どちらかといえば、忙しい年度始めより夏の旅の思い出の方が多い。一つは夏山登山が好きだったのと夏の方が休暇を取りやすかったからである。

近ごろは団体旅行が盛んなようだが、わたしはこの手の旅行はあまり好きでない。旅は本当に気の合った者同志が一番いい。それに、わたしは酒が飲めないので、できることなら酒の飲めない人の方がいい。幸い、そのころ、山は好きだが酒は嫌いという仲間がいたので、同じメンバーの旅が六年も続いた。

史談会の仕事をするようになって、ときどき一緒に旅をするが、これはもっぱら史跡めぐりが中心になる。やはり、こうした史跡めぐりの旅をしていると、いまから十一年前に行った木曽路の旅が思い出される。

あれは確か八月のはじめだった。木曽の御岳登山をメーンに十日間の日程で旅をした。できることなら、今度の旅行は乗物をさけ、昔の人と同じように木曽路を歩いてみようというので長い日程になった。

はじめの予定は、船で大阪まで行き、大阪から汽車でということにしたが、これでは時間的にうまくいきそうにないので、「富士」で行くことにした。

朝早く名古屋に着き、一時間程待って中央線に乗った。中津川で汽車を降り、最初の目的地馬籠までは歩くことにする。距離にして約十キロぐらいあったろうか。まだ朝早かったが、リュックに登山用具を詰めての夏の日射しはさすがに暑かった。

落合宿を過ぎ、十曲峠の石畳を歩く。この石畳の一部は岐阜県の史跡に指定されている。昔の人はこの道を通っていたのだと思うと、なんだかタイムスリップして江戸時代にかえったような気がした。バスでは通れない所である。

路傍の茶店で一息入れ、名物の御幣もちを食べながら汗をふく。このあたりから下り坂になり、恵那山を背に田んぼ道をたどると、馬籠の宿が見えてきた。石畳の坂道は人でいっぱい。今日の予定が妻籠までなのであまりゆっくりはできず、とにかく藤村記念館を見学することにする。わたしの好きな「夜明け前」の一節が頭に浮かんでくる。

木曽路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街路はこの深い森林地帯を貫いてゐた……。

昼過ぎ馬籠を離れる。これからまた妻籠まで登り坂である。十キロ程炎天の中を歩いて、さすがに疲れが出たのと、あとの予定と合わせて、気は進まなかったが頂上までバスで行くことにする。

男埵（おたる）の滝の見える所でバスを降りる。滝は二段にかかり、上方を雌滝下方を雄滝と呼ぶ。旧街道をこの川沿いに下って行くと、眼下に妻籠の宿場が見えてくる。一筋の道をはさんで卯建（うだち）の見事な民家が並ぶ。ありのままの街道のふんいきをとどめた

集落である。宿場のほとんどの家が民宿と土産物店を営んでいる。佐伯の山手通りを文学と歴史の道と呼んでいるが、ここは本物の歴史の道である。白いシャツとジーパンで道にあふれている若者達が、ひととき昔の旅人にかえったような錯角に落ちいる。

今夜の宿は部落の入口にある二階建のやや古びた家だった。おばあちゃんが一人できりもりしていた。夕食は同宿の四人の若いお嬢さん方と一緒に取った。山菜料理を中心にした食事は山の臭いがしておいしかった。夜は大ぶとんを着て寝るほど涼しく、あれは木曽節だったか「夏でも寒いヨイヨイヨイ」と歌の文句を思い出しているうちに、ぐっすりと眠りに落ちた。

翌日、朝早く宿を出る。南木曽の駅まで三キロ程の道を歩く。今日の予定は、御岳の登り口にあたる王滝まで行くことになっている。

南木曽から上松まで汽車で行く。上松から少し歩いてあと返ると、寝覚の床がある。陽光に輝く花岡岩の折りたたんだような箱状の巨岩が続く。北陸の東尋坊を小さくしたような眺めである。寝覚の床を地形的に説明すれば、

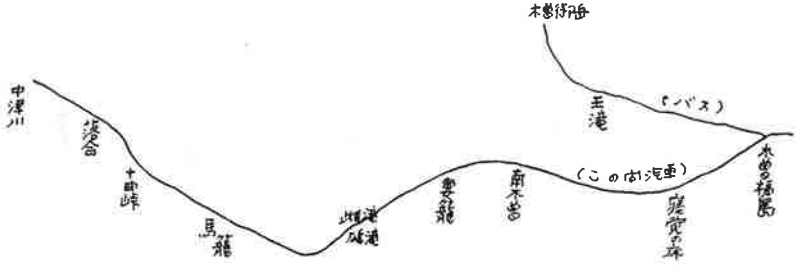
「白地に赤味をおびた岩石台地」

という意味があるそうだが、人気のない岩の上に立っていると、何とも言えない気持になって、思わずぶるぶると身震いした。

驚いたのは、タクシーを拾おうと出口へ行ったら、遇然にも佐伯幼稚園の先生方に出会ったことである。この時ばかりは、(世の中、広いようで狭いなあ)と思った。

上松の駅から木曽福島まで再び汽車に乗る。

木曽福島は木曽路の中で一番大きな宿場まちである。ここは帰りにもう一度通るので、史跡めぐりは後にして、すぐに王滝へバスで向う。空模様があやし



くなってきた。台風が接近しているらしい。御岳の登山口は他にもあるが、王滝コースは、バスが七合目まで行くので、一番楽なコースと聞いている。ここの泊りも予約しておいた民宿である。京都から着いたという若夫婦、千葉の農協で働いているとかいう娘さんが今夜の同宿である。若夫婦は、京都の暑いけんそうをさけて、静かな山の宿で過そうという目的で、娘さんの方はぶらりひとり旅で、話をしているうちに「是非同行させてくれ」ということになり、一緒に登山することになる。

夕食を終えたころからとうとう雨になった。山の中は肌寒いほど冷えてきて、入浴を済ませると、すぐに床に入る。

朝、幸い雨は止んでいたが、相変わらず空模様はあやしく、先が思いやられた。王滝からバスで登山口まで行く。ここからなら三千メートルのうち九百メートル登ればよい。

バスを降りると、間もなく激しい雨と風になった。どうやら台風がやってきたらしい。これでは登山は危険である。それでも折角来たので心残りがして迷っていると団体バスが着いた。見れば、みんなもう相当年のいった人ばかりである。見ていると、一行は雨着をつけてこの嵐の中を登り始めた。御岳は古くから信仰の山になっているところから、その信者の一行と見えた。

「あんな年寄りでも登るんだから」

と、わたし達も雨具を着けてあとに続いた。場所によってはロープをつたっての危険な箇所もあり、改めて信仰の強さというものを感じた。

夏とはいえ、三千メートルの頂上近くは寒い。冬の下着とセーターを着ているのにガチガチと震える。岩にへばりつくように立っている山小屋が見えてくる。

「主人が山頂で山小屋を経営しているから寄って下さい。電話をしておきますよ」

と、宿を出る時、奥さんが言った。

山小屋は信者の宿になるそうで、先程の一行も今夜はここで泊るらしい。二三百人は泊まれるという。

「ああ、着きましたか。寒かったでしょう。さあ、こちらへいらっしゃい」

と、山小屋の主人はいろりの傍へ招じてくれ、熱いみそ汁を用意してくれた。一杯の酒とみそ汁で人心地がつ

くと（折角登ったのだから）と、頂上まで足を伸した。
激しい雨と風である。少し広くなった頂上の小さな祠が吹き飛ばされそうに荒れている。十分に注意しながらおまいりを済ませて山を下る。
「下りたらすぐに風呂に入れるように電話しとくからね。気をつけて下りるんだよ」
と、山小屋の主人は言ってくれた。
下りは楽だが、それだけに寒さが身にしみる。用を足したくなったが、重装備のうえ、寒さで手がかじかんで思うようにならない。どうせぬれているんだからと、とうとう歩きながら用を足した。
バスに乗ってしばらくすると、熱気で臭気が漂い始めた。原因がわかっているだけに気がきでなく、一刻も早くバスの着くのを祈った。
宿へ帰ると、既に風呂の仕度もできていて、ストーブまで用意されていた。わたしはあいさつもそこそこに風呂に飛び込み、上から下までぬいだものをごしごしと洗った。総桧の風呂の中では様にならない図である。
それにしても本当に親切な夫婦だった。先年、王滝は大地震に見舞われた。わたしはあの時のことを思い出し早速見舞状でもと思ったのに、どういうものか、あの時の記録が見つからず、心ならずも出さず仕舞になってしまった。あれ以来、王滝からの登山口は閉鎖されたと聞いている。
翌朝、名残りを惜しみながら宿を出る。千葉から来ていた娘さんは「木曽福島までも同行したい」と、一緒に出発する。
木曽福島の駅で、娘さんは別れを惜しみながらバスを降りた。わたし達はそのまま駅を過ぎ、木曽義仲の菩提寺興禅寺・郷土館・関所の跡などを見学する。源氏再興の蔭にかくれがちな木曽義仲の悲劇の物語をその地に立って反趨する。
再び木曽福島から汽車に乗る。今日の目的地は木曽路最後の奈良井の宿である。だが、直接汽車で奈良井に行くのではなく、一つ手前の藪原で降り、そこから鳥井峠を歩いて越すことにしている。藪原には有名なお六櫛というツゲの櫛があると聞いていたが、櫛は人に贈るものではないというので買わなかった。
山道に入ると、道は狭かったが、よく整備されていて地元の観光に対する力の入れ方がわかったような気がし

た。木々の覆い茂った山道は涼しく、昨日の天気とうって変わった暑さもなんともなかった。

頂上の鳥井峠は海抜千百九十七メートル。峠を越して奈良井までは約一時間半。思った程はきつくない。行き交う人もまれで、先を急ぐ旅でもないのでゆっくり歩く。ここの頂上からは御岳さんが仰げる。聞けば、中山道からは御岳の見える場所は二箇所しかないそうで、ここはその一つである。仰げば、昨日の天気がうそのように、山の姿がくっきりと青空に浮かんでいる。

夕暮れ近いころ奈良井に着く。山国の日暮れは早い。昼の暑さがうそのように、風が肌を通り過ぎていく。部落の入口にお地蔵さんがある。おまいりしてまちへ入る。ここのたたずまいは、これまで通ってきたどこよりも昔のおもかげが残っているような気がした。町並み保存の為、住民の方もずい分と無理をしているということであった。わたしもあちこち史跡めぐりをしたけれど、これ程昔の姿を残している所はなかったように思う。それも一町一村だけでなく、木曽路十三宿にわたっているのだから、大変なことだと思う。恐らく気候のよい半年間に観光客は集中するのだろうが、その人なみを見ていると観光に対する力の入れ方の違いがわかるような気がした

入浴を済ませて夕食の膳に着く。今夜の泊りは三十人ばかり。この宿のしきたりで、みんな一緒に食堂で食べることになっている。食前に、宿の主人があいさつをする。木曽の話から食べ物の話まで出る。

「木曽は山の中だから山菜料理が中心です。中でも豆腐とそばは絶対に欠かしません」

と言った。わたし自身は豆腐やそばより山菜料理が一番おいしかった。

夜になると、さしもの通りも人影もなく、また、車も一台も通らなかった。どこから聞こえて来るのか太鼓の音に誘われて外に出てみると、青年団員とおぼしき若い男女がおはやしのけい古を道の真ん中でしていた。多分盆おどりか祭りが近いのだろう。わたしは、日本の中にまだこんな土地が残っているんだなあとしみじみ思い、いつかまた機会があったら、今度は十三宿全部歩いてみようと思った。木曽路は歩いてこそ味のある所である。

翌朝、木曽路に別れを告げ、次の目的地松本へ向けて汽車の人となった。

終